ちなみに、私は戊辰戦争は思想、階級意識経済などが異なる集団が冷静な話し合いが出来ないままに武力衝突に至ったもので、両者のまとめ役として政治的外交的手腕のある人物（例えていえば坂本龍馬など）を欠いたことによる国家的悲劇であり、いうなればアメリカ南北戦争の様なものであった、と思っている。

〝閑話休題〟

本書を通して読めば、内容の重複が目立つが、その都度の資料の探索が丹念で出所が明らかにされていること、著作作製による表が多用されていることが、読者にとって年代の理解に役立っていることは評価に値すると思う。

著者の中西淳朗氏と私は同年輩であり、十数年前に全国保険医団体連合会において共に機関紙部、文化部を担当したことのあるいわば戦友である。氏は当時から企画力、実行力が抜群であり、「近代医学のあけぼのを探る医学史めぐりの旅」と題して日本全国の医史蹟を歴訪する企画を立て、十数回にわたって実行に移された。私もそのほどんどに同行し医史学に対する興味を改めて啓発されたことは記憶に新しい。

博覧強記の権化である氏の今後のご活躍を願っている。

（北小路　博央）

〔神奈川県保険医協会、横浜市神奈川区金港町五―三六、東興ビル二F、　電話〇四五―四五三―二四一一、平成十三年八月、A四判　三三八頁、三〇〇〇円〕

澤田　祐介　著

『蘇る医神アスクレピオスの物語』

多発する医療事故、患者の権利意識の昂揚などを背景に、医の倫理の向上が強く叫ばれている昨今、その原点ともいえる医神アスクレピオスやヒポクラテスが改めて見直されつつある。このような時期に、本書が上梓されたことは誠に意義深いものがある。

私自身も、アスクレピオスには大変興味を抱き、アテネ、コス島、エピダウロス、ペルガモンなどのアスクレピオス神殿跡へは二、三回ずつは訪れているが、その都度感慨を新たにさせられている。日本病院会でも、数年前より「医学の歴史を訪ねて」という旅を催し、アスクレピオス神殿を中心に各地の医跡巡りを行っているが、とくにコス島のアスクレピオス神殿における古代ギリシアの医師になるための「ヒポクラテスの誓い」の儀式には、参列した一同が医の原点を強く想起させられ、感激ひとしおであった。今年も五月の連休を利用して、トルコのペルガモンのアスクレピオス神殿跡を訪ねる旅を催行の予定になっている。

本書は、一読して大変やさしい表現で、しかも楽しく読めるよう、アスクレピオスの子孫で日本の離島で開業している医師が先祖を回顧するという独特な物語構成がとられている。医史学的な検証というよりは、むしろカタカナ名がたくさん出てきて読みづらいといわれるギリシア神話が、アスク

レピオスを中心に実に読みやすく語られている書といえよう。

しかしながら、書評ともなればいささか辛口の部分も敢えて述べなければならない。まず第一には、「医師アスクレピアデスの前口上」に関しては、私自身びっくりして飛び上がり、「まさか」と「もしや」が交錯しながら最後まで読み、「あとがき」で「少し別な要素が加わる結果となりました」「安土懸鈴の思いは、……このお二人の先輩からのご示唆による部分が多いものです」に至って初めて「やはり」とは感じたが、非常にえん曲な表現で、アスクレピオスに関して深い造詣のない大方の読者にとっては、虚構と現実を誤って認識する危険性を感じる—奇想天外な発想と筆者の文章表現がすばらしいだけに……。どこかにフィクションである旨明記するか、「かくあれば面白い」と願う作者の夢であることを感じさせる文章表現が望まれる。

第二に、第Ⅳ章「一匹の蛇と二匹の蛇のこと」であるが、「……これはどこかで誤解があったように思えます」と片づけられない多くの論説がある問題である。「鳩の如く平和で、蛇の如く賢く」というのは聖書からきているし、「出版社Frobenが間違って以来」という説もあるし、アスクレピオスの故郷コス島の市章は二匹の蛇がいるし、遠くメソポタミアの医神ニンギシダの酒盃には二匹の蛇が描かれているし、ギリシアのデルポイにあるアスクレピオスに捧げたモニュメントにも二匹の蛇が絡まっている。要は一九一〇年のアメリカ医師会の決定以来、一匹の蛇と棒を医学のシンボルとしようとなったのである。

第三に、今なおギリシア、トルコに残る数ヵ所のアスクレピオス神殿跡を写真とともにぜひ紹介してほしかった。ローマのティベリーナ島神殿跡は、南側防波堤部分が、昨年改装されて写真とは少し異なっているし、「……遺物は何も残されていません」とあるが、当時の「聖なる泉」は残っているし、教会内部の数本の柱は神殿当時のそのままである。

以上、敢えて重箱の隅をつついたが、「欲を言えば」という読者としての願いからであって、いささかも本書の価値を下げるものではない。医の原点ともいえるアスクレピオスが本書によって分かりやすく紹介された功績は大きく、医療に携わる多くの人々に読まれることを期待するものである。

さらに蛇足ながら、アスクレピオスに関する宗教史的考察、考古学的考察、医史学的考察とは別に、本書のようなカール・ケレーニイの表現によるいわゆる「神話学的散歩（プロムナード・ミュトロジク）」に関しては、カール・ケレーニイ著、岡田素之訳「医神アスクレピオス—生と死をめぐる神話の旅」（白水社、一九九七）がある。合わせてお読み頂くといっそう興味深いものがあると思う。

（星　和夫）

〔医歯薬出版株式会社、文京区本駒込一—七—十、電話〇三—五三九五—七六二七、平成十二年八月、A五判　二八四頁、二六〇〇円〕